誌上発表

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

潰瘍性大腸炎患者腸液中のサイトメガロウイルス DNA PCR 診断と病理診断および血中 CMV antigenemia との比較

研究協力者　　金城　福則　　浦添総合病院 消化器病センター　　顧問

研究要旨：潰瘍性大腸炎における CMV 腸炎の合併においては病理診断での感度が低く、感度の高い検査法が求められている。腸液 CMV DNA PCR 法は比較的低侵襲で簡便な検査である。病理診断に対して、同診断法と血中 CMV antigenemia 法を比較したところ、腸液 CMV DNA PCR 法が感度にて血中 antigemenia 法を大きく上回った。このことは他検査法で検出できない CMV 腸炎の合併を検出できる可能性を示したと考えられる。一方で特異度はやや低く、偽陽性に関しては慎重な検討が必要である。

共同研究者
伊良波　淳（浦添総合病院）
金城　徹（琉球大学附属病院）
岸本　一人（琉球大学附属病院）
外間　昭（琉球大学附属病院）

A．研究目的

潰瘍性大腸炎における CMV 腸炎は病理診断を確定診断としているが、感度が低く確定診断に至らないことも多いため、感度の高い診断法が求められている。腸液中の CMV DNA PCR 法は侵襲性も高くなく、簡便な検査法である。同検査法と病理診断、血中 CMV antigenemia と比較することにより同検査法の有用性を検討することを目的とした。

B．研究方法

下部消化管内視鏡検査を施行し、腸液を採取した 57 例を対象とし、対象症例において病理診断が採取された 31 例、血中 CMV antigenemia が採取された 19 例を比較し、病理診断に対する腸液中 CMV DNA PCR 法と血中 CMV antigenemia 法での感度、特異度を比較した。なお、研究に当たっては検体に独自にナンバリングを行い、患者情報が同定できないように配慮した。

C．研究結果

病理診断に対する腸液 CMV DNA PCR 法の感度は 100% 特異度 71%、血中 CMV antigenemia 法の感度は 25% 特異度 89%であった。

D．考察

病理診断に対する感度において腸液 CMV DNA PCR 法が血中 antigemenia 法を大きく上回った。腸液 CMV DNA PCR 法は他診断法では検出されない CMV 腸炎を検出できる可能性を有しているが、特異度は比較的低く、偽陽性に関して今後十分に検討する必要があると考えられた。

E．結論

腸液 CMV DNA PCR 法は潰瘍性大腸炎に合併する CMV 腸炎検出の有用な検査法となる可能性を有している。

F．健康危険情報

特記すべき事項なし

G. 研究発表

1.論文発表

特になし

2.学会発表

2014 ECCO

H. 知的財産権の出願・登録状況

特に予定なし